



1-1 朗読芝居をする佐藤剛史さん



1-2 演技の後お客に挨拶する佐藤剛史さん

今回は、静岡市の藁科地区について、佐藤剛史(さとうつよし)さんの朗読芝居を通して紹介します。

1 「伽藍博物堂」を主宰する佐藤剛史さん

佐藤剛史さんは静岡大学を卒業してから、「GM企画」の名で活動を続けていました。その後1993年(平成5年)に、「伽藍博物堂」という名で活動を始め、その企画運営を推進して主権をしています。「何もない空間」としての伽藍堂に、博物館のようにさまざまなものを詰め込んだものを企画していきたいというコンセプトに基づいて発足したのが「伽藍博物堂」です。また、舞台に係る企画から制作・演出に至るまであらゆることに応じています。

佐藤さんは静岡市子どもミュージカル2014・2016演出、磐田市高等学校演劇連盟講師などを歴任し、静岡県演劇協会会員・日本演劇教育連盟会員・日本演劇作家協会会員で、劇団かいぞく船の代表を務めています。



2-1 熱演する佐藤剛史さん「photo ayako ishikawa」

2 芝居における活動内容

佐藤さんは現在、劇作や演出など舞台に係る広い分野で活躍しています。主な活動内容としては、カフェなどいたるところでの一人芝居、「劇団かいぞく船」という名の10代の子どもたちで構成する劇団公演の演出活動、その他演劇ワークショップや公演のプロデュースなどもすることがあります。中でも「劇団かいぞく船」の活動は活発で、年数回の舞台公演を行っています。

また、静岡市で行われる演劇祭「演劇カタログ」で舞台監督を勤め、静岡市七間町での市民舞台「セブン・エレファント・プリング・ハピネス」では制作や演出を担当し、大人との舞台でも重要な裏方として活動しています。



3-1 中勸助の作品朗読の舞台1



3-2 中勸助の作品朗読の舞台2

3 「朗読芝居で藁科のおはなし」における藁科での中勸助

佐藤さんの今回の朗読芝居は、『銀の匙(さじ)』の作者である中勸助(なかかんすけ)が『樟ヶ谷(くすがや)』『羽鳥(はとり)』という日記に綴った時の模様でした。中は夫人とともに静養のため昭和18年10月に東京から安倍郡服織村(現在の静岡市)新聞字樟ヶ谷へ、その後昭和20年4月に同羽鳥に移り住んでいました。中は羽鳥村時代に第二次世界大戦の米軍による空襲を経験していて、今回の朗読芝居はこの時の模様を詳らかに、かつリアルに記されている作品を、佐藤さんが表現豊かに演じたものです。

今回は、コロナ禍で新型コロナウイルス対策をとりながらということで、2階の広いホールにもかかわらず20人に限定して募集をしていましたが、今回の朗読芝居はほぼ満席という関心の高さでした。



4-1 中勸助文学記念館入口



4-2 中勸助のたたまいを残す杓子庵

4 中勸助との関係の深さを伝える「中勸助文学記念館 杓子庵」

中夫妻は羽鳥村を気に入り一時永住も考えたようですが、昭和23年4月に東京に戻りました。約4年半の間に、この『羽鳥』を始め羽鳥を題材に数々の作品を残していて印象深さがうかがえます。また、服織中学校の校歌の作詞をするなど、その後も服織の人々との交流は続きました。その後静岡市は、中夫妻が住んでいた旧前田邸を「中勸助文学」の記念碑として位置づけ、杓子庵の復元や整備をして活用しています。中勸助文学記念館の入口には、文学碑「風のごとし」が建立され、中の服織村に対する思いが偲べれます。



5-1 静岡市藁科複合施設



5-2 藁科川の河川敷でのグラウンドゴルフ光景

5 藁科の地にある静岡市立藁科図書館と静岡市藁科生涯学習センター

今回の佐藤さんによる朗読芝居は、昔話や文学作品を通して藁科地区の特徴を市民の方々に知っていただく目的で、静岡市立藁科図書館と静岡市藁科生涯学習センターが共同で企画・実施しました。前半と後半の2回に分けて開かれ、前半は子どもさん向けに「藁科の昔ばなし」が演じられ、後半は大人向けに「藁科の中勸助作品集」を題材に朗読芝居が演じられました。静岡市立藁科図書館、静

岡市藁科生涯学習センターは静岡市藁科複合施設とも称され、1～2階を後者が3階を前者が使用して、今回は2階のホールにおいて開催されました。

静岡市立藁科図書館と静岡市藁科生涯学習センターが立地する藁科は、低い山に囲まれ藁科川がゆったり流れる自然豊かな土地です。中勘助が住んだ杓子庵のある中勘助文学記念館も藁科川のほとりにあります。中の文学作品の源泉にもなっていることが納得できる気がします。藁科川は鮎釣りができる川としても有名で、河川敷では多くの人がグラウンドゴルフに興じている姿があります。

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男